

2006年5月28日 復活節第7主日礼拝

『時の賜物』

(コヘレト3章1~11節、使徒言行録20章13~16節)

パウロが、エフェソで二年程伝道していました。主のことばが勢いよく広まっていったのですが、しかし、町中を揺るがす騒動が起きました。パウロに反対する人達が起したものでした。それで、パウロはエフェソの町を出なくてはなりません。その後、マケドニア州のフィリピを經由してトロアスという港町に行きました。そこで、仲間たちと落ち合い七日間を過ごしました。その町にも教会が建てられていました。週の初めの日、人びとがパンを裂くため集まっていた時のことです。パウロの説教が長く続いたためか、一人の青年が眠けにおそわれ三階の手すりから落ちてしまう事故がありました。驚いて、見に行ってみると この青年は、既に死んでいたのです。パウロは、この青年エウティクを抱きかかえて言いました。「騒ぐな、まだ生きている」。パウロは、こうやって下に降りて行き話をを続けました。パウロの言ったとおりに、この青年は生き返りました。人々は、死んでいたのに生き返った青年の事で大いに慰められました。

さて、一方パウロ達は、トロアスを出発することになりました。13節「わたしたちは先に船に乗り込み、アソスに向けて船出した」仲間達は、パウロより先に船に乗ってアソスに向かって行きます。アソスは、トロアスから南約三十キロのところにあります。そこで、パウロを船に乗せる予定でした。というのは、パウロは自分一人で陸を歩いてゆくつもりだと前もって仲間に知らせておいたからです。どうして、パウロはわざわざ一人で歩いて行くことにしたのか。パウロがたまたま体調が悪く、船酔いなどにかかりやすかったのではないかという人もあります。何ともはっきりとしたことはわかりません。

歩いて行ったパウロと、船でいった仲間たちは行き違いになることもなく無事アソスで落ち合うことができました。彼らは、早速パウロを船に乗せ、ミティレネとい港に落ち着きました。そこは、レスボスという島の東海岸にあって、アソスから南に約七〇キロ程のところ position しています。翌日、パウロ達はそこを船出しキオス島の沖を通過して、その次の日サモス島に寄港し、翌日ミレトスに着きました。ミレトスは、小アジア州で最長の川マイアンドロスの河口にある港町でした。対岸を東に少し行くとエフェソの町が目の前にあります。しかし、パウロ達は、こう考えていました。アジア州で時を費やさないように、そのためにエフェソには寄らないで航海しようと。エフェソの町には、港がなかった。それで、エフェソに立ち寄るためには、一度船を降りて歩いて行かな。くてはなりません。歩いてエフェソに行き、それからまた、船でエルサレムに向かうしたら、とても時間がかかります。パウロ達は、できるだけ早く目的地のエルサレムに到着したかったのです。何ごとも、早めにするのが神様くださった時間を大切にすることになるのでしょうか。確かに、パウロはエフェソの町で伝道していた時からパウロはエルサレムに行きを考えていました。エルサレムに行きそしてローマにも行こうと(使徒19章21節)。それが神様の

御心と考えました。

パウロが、エルサレムに行けば、どんな目に遭うのか。危険が待っていることは間違いありません。エルサレムには、パウロの事を悪く言う人達が少なからず待っております。考えてみたら、パウロが、回心したばかりの時から彼を悪くいう人達がいたのです。というのもパウロは、ファリサイ派という厳格なユダヤ教の一派に属していました。このファリサイ派の人たちは、イエス様を信じる人達に反対していました。パウロもそれは熱心なファリサイ人でした。神様のためだと思って、イエス様を信じている人達を男女問わず捕まえていたのです。この時も、パウロはクリスチャンを捕まえるため、エルサレムからダマスコに向かう途中でした。パウロは、突然強い天からの光に照らされて、その場に倒れて目が見えなくなりました。そのパウロに、イエス様が現れ「サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」といいました。その時、パウロ気付いたのです。神様が、約束したメシアはイエスさまだったのだと。自分は、神様がお遣わしになった方に逆らっていた。この方を苦しめたのは自分自身であったと。パウロは、イエス様を心から信じて洗礼を受けました。その後、パウロはあちこちの会堂でイエス様のことを「この人こそ神の子である」と力強く伝えました。パウロの回心を多くの兄弟たちは喜んでいたので。でも、中にはパウロの回心など信じないと言い張る人達がいました。パウロが、エルサレムに来て弟子の仲間に入ろうとしました。しかし、エルサレム教会の人達はパウロを弟子だとは信じないで恐れたというのです（使徒 9 章 26 節）。自分たちを迫害していた人が回心するなど信じられなかった。いくら全能の神様でも、イエスさまでもパウロのような人を回心させて救うなんて。そこまでは、できないと思ったのでしょうか？ 最初、疑っていた兄弟たちもパウロが回心した事で喜ぶようになったのです。

しかし、今度は、パウロが異邦人にイエスキリストの福音を伝えたということで不満を言うようになったのです。パウロ達の伝道活動が突って、アンティオキアを初め異邦人の町の各地にも教会が建ちはじめます。異邦人たちも、救われる事は本当は喜ばしい事です。しかし、クリスチャンの中のユダヤ人の一部の人達にとっては面白くなかったのです。こういった人達が、異邦人の多い教会にやって来てこういったのです。異邦人は、洗礼だけでは救われない。モーセの慣習に従って割礼も受けなくてはならないと。異邦人は、自分たちユダヤ人と同じようにしなければ、割礼も受けていろいろなむかしからの習慣を守らないといけない。つまり、異邦人も自分たちと同じになるべきだそうしないと救われないというのです。これは、ユダヤ人のおごりだと思います。この人達の言い分は、自分たちこそ神様に選ばれた特別な民族だと思い込みからきているのです。これは、ほんとはユダヤ人たちだけの問題ではありません。クリスチャンになって、信仰歴が長くなる。すると、ついわたしたちにもおごりが出てくる。ここに出てくるユダヤ人と同じような事をしているのです。新しく信仰に入った兄弟たちに対して、自分たちと同じようにならないと本物のクリスチャンではないといい、自分たちのやり方を押しつけてしまう。パウロに反対していたユダヤ人のクリスチャンたちと同じ過ちを誰もがしてしまうのです。実は、この人

たちはパウロに反対したのではなく、パウロを通して働かれた、主の御業に反対してきたのです。もちろん、パウロに反対してきた兄弟たちはそんなつもりなどなかったと思います。自分たちこそイエス様のために熱心にやっていると思っていました。

やがて、パウロはエルサレムの神殿において逮捕され、裁判にかけられます。それから、パウロは皇帝に上訴してローマに護送される事になるのです。そのことを全く考えていなかったわけではありません。エルサレムに急いでいっても、今まで以上に大変な事がまっています。もしも、辛いことが待っていると分かっていたらわたしたちだったら早く行きたいなどとは思わないでしょう。しかし、パウロは辛いことを先に伸ばす事はしませんでした。そてれに、パウロは決して何事も早めにとせっかちに考えてばかりいたわけのではないのです。第二伝道旅行を始める時、パウロ達は当初アジア州に伝道にいこうとしていました。その時は、イエス様の霊が現れアジア行きを禁止されました。それで、一行は遠回りをしてマケドニア州から伝道を始め、それからアジア州を回ることになったのです。その事を通して、パウロは教えられました。何事にもふさわしい時があるのだと。「神は全てを時宜にかなうように造られた」(コヘレト3章11)。わたしたちの考えではなく、神の御心に適った時が一番なのだと知りました。いつも、パウロ達は神の恵に導かれて御心に沿って来たのだけなのです。先を急いで進む時も、回り道をしていた時も。「人間の智恵によってではなく、神の恵の下に行動してきました」(コリント二1章12)。「また(神は)永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神の業を始めから終わりまで見極める事は許されていない」(コヘレト3章11)。確かに、わたしたちには神様の業を最初から終わりまで見ることはできません。しかし、イエス・キリストを信じて、主の御許を離れることがなければ、わたしたちは神の国を見ることが出来ます。神の国を見ることは、神の救いの御業の完成を見せて頂くことです。神の御国を待ち望みつつ、わたしたちも、神の恵みに導かれて歩みたいと思います。あせらず、たゆまず、あきらめることなく。只、主イエスの備えた道を歩み続けたいと思います。それが、本当の意味で神様がくださった時を大切にすることになるのです。 [説教者：堀地敦子牧師]